

30年振りに全国義士会連合会総会開かれる



発行人
〒104-0052
東京都中央区月島3-15-9
全義連事務局
TEL 03-3534-0666
編集者 荻原 栄

松岡康彦

だき感謝いたします。

令和五年十月、三十年振りに全国義士会連合会の総会が泉岳寺において開かれました。世間での忠臣蔵の認知度が低下する中、

どのような総会になるか不安でしたが、成功裏に開催できましたことは、各加盟団体のご協力によるものと御礼申し上げます。

新しい中央義士会の運営が軌道に乗りつつある中、これまで全義連事務局としての仕事が多分に出来ておりませんでしたので、まずは総会の開催を実現すべく理事会で議決しました。二年前から中央義士会として、赤穂義士会、赤穂義士顕彰会、京都山科義士会、京都義士会、大阪義士会、笠間義士会の各全義連加盟団体にご挨拶に伺いました。その後、北海道義士会にもお伺いでき、意思疎通の良い関係が構築できたと思っております。その際、皆様に総会を開催したい旨を打診したところ、快諾いた

だき感謝いたします。十月十九日十三時に萬松山泉岳寺に集合。本堂において松根大地住持導師による法要が行なわれました。その後庫裏にて総会を開催。会場に入る際の皆様の和やかなお気持ちが伝わってきました。大内満利子全義連会長からは文面での挨拶をいただきました。中央義士会より浅野会長挨拶に続き、柿崎理事長から総会開催に至った経過の説明がありました。続いて参加された各義士会から自己紹介と活動内容の近況報告をしていただきました。また、新潟県新発田市武庸会からもオプザーバーとして参加いただき有り難い限りでした。京都義士会、大阪義士会からは文面での参加になりましたが、中央義士会で読み上げさせていただきました。自己紹介と近況報告によって、各義士会の方々の皆様の現状を聞くことができ、相互理解の一步になったことは開催した甲斐があったと思えます。

総会終了後は泉岳寺講堂に移動し、浪曲会が開かれました。浪曲師国本はる乃、曲師広沢美舟による赤穂義士伝「大石山鹿護送」の一席です。若き



参加者全員集合 泉岳寺講堂にて

大石内蔵助が流罪の軍学者「山鹿素行」を赤穂に護送する時のエピソードです。次の題目「赤垣源蔵徳利の別れ」は皆様ご存知の通りです。国本はる乃さんによる熱演は感動の一言でした。

浪曲会終了後は、新橋の会場で中華料理をいただきながら懇親を深めることができましたことは何よりでした。

翌二十日は観光バスに乗り都内忠臣蔵史跡巡り

が行われました。史蹟と巡る順番は、柿崎理事長が選定。史蹟を順に記載すると、小山屋跡（大石内蔵助潜伏地 天ぶら天茂）↓堀部弥兵衛住居跡（討入り最終表明）↓堀部安兵衛住居跡（討入り集合場所 安兵衛公園）↓杉野十平次住居跡（討入り集合場所）↓吉良邸跡（討入場所）↓前原伊助住居跡（討入り集合場所）↓宝井其角住居跡（茅場町）↓堀部安兵衛碑（八丁堀 亀島橋端）↓栗崎道有屋敷跡（八丁堀 駅前）↓赤穂浅野家上屋敷跡（聖路加国際大学）↓築地本願寺↓奥平家上屋敷跡↓脇坂淡路守屋敷跡↓仙石伯耆守屋敷跡（吉田 富森出頭地）↓六本木通り↓南部坂↓三次浅野家下屋敷跡（赤坂氷川神社）↓赤穂浅野家下屋敷跡↓上杉家中屋敷跡↓田村家上屋敷跡（浅野内匠頭切腹地 新正堂）↓観智院（豊替現場）↓長松寺（荻生徂徠墓）↓細川邸跡（大石内蔵助他十六名切腹地）↓泉岳寺解散。大変内容の詰まった史蹟巡りでした。

全義連加盟の皆様のお陰を持ちまして誠に有意義な二日間となりました。皆様様が力を合わせて「忠臣蔵」「赤穂義士」を盛り上げ、赤穂義士四十七士が忠義心を貫き忠誠心をなし遂げたことを、後世にしっかりと伝えていくのが私達の使命だと、今回の総会で改めて感じました。引き続き全国義士会連合会の皆様が相互の関係を深め、さらに活発な活動を続けて行くことを心より祈念いたします。



庫裏での総会



泉岳寺本堂での法要



20日のバスツアー
日本橋小山屋跡にて



講談の様子

京都義士会の紹介及び活動

会長 橋本一妙

當山は本妙寺と号す日蓮宗の寺院で、通称義士の寺と称します。

境内墓所には、宝永元年（一七〇四）四月に当時京都に在住した赤穂浅野家御用商人綿屋善右衛門が建立した墓碑があります。この墓碑は吉田忠左衛門、その子吉田澤右衛門、忠左衛門の実弟である貝賀弥左衛門の三義士と貝賀の妻おさんの四名を合祀しています。貝賀は元来日蓮宗で、赤穂城明け渡しの後よりかねてから昵懇の間柄であった京都の綿屋善右衛門方に妻おさん、娘お百と共に寄寓し妻子の行く末を善右衛門に委ねていました。

元禄十四年十二月十四日に吉良邸に討ち入りし、翌年二月四日切腹後に吉田、貝賀の三名の鬢髪と貝賀の妻おさんを葬り、綿屋善右衛門は貝賀の宿坊である本妙寺に墓碑を建立し、永く参詣怠らず供養を続けました。一人残された貝賀の娘お百は、綿屋善右衛門が懇ろに教育し、長じて綿屋の同業者である帯屋の齊藤源兵衛に嫁がせ、その際に亡

き父貝賀が所持した義士の書簡、槍先などの遺品をお百に持たせました。それらの遺品は齊藤家九代にわたり家宝として伝わります。

時代が流れ昭和の初期に齊藤家はトラ老女が最期となり貝賀の血族が絶える時、齊藤家の家宝である貝賀の遺品全てを本妙寺に寄贈されました。昭和五年九月に納められた齊藤家の家宝は義士の遺墨七十余点、槍先などの遺品四点あり、それらの貴重な遺墨遺品などを管理保存するために京都義士会を立ち上げ、令和の今日まで赤穂義士追悼、顕彰する赤穂義士祭を継承しています。

例年の赤穂義士祭は十二月十四日に本妙寺義士堂（宝物館）に遺墨遺品を展示し、赤穂義士元禄義挙追悼法要を奉行しています。本堂では日本琵琶楽協会関西支部様の全面協力の下に「赤穂義士伝」を十二名の琵琶演奏者による奉納演奏が行われ、境内ではテントを張り有料ながら討ち入りそばを提供しています。加えて平成二十一年からは兵庫県赤穂市より赤穂義士会会長（赤穂市長）御名代の交流大使二名が遠路のところ御参拝いただき、会長様の心あたたまるメッセージ、交流大使である赤穂市民の方々の熱い思いを毎年届けていただいております。



綿屋善右衛門建立墓碑



四十七士像

京都市山科義士会の活動紹介

会長 進藤秀保

庶民の人気のある娯楽「浪花節」は赤穂義士伝と云う新作で武士道鼓吹の旗印を立て、先ず桃中軒雲右衛門が踊れ、続いて吉田奈良丸が立派に基礎を作り、「浪曲」として一大芸能に押し上げられた。その雲右衛門は大石閑居の地、山科に大石の銅像を作ろうと原型も出来上がっていましたが出来ないまま亡くなりました。

奈良丸は二代に名を譲って大和之亟となり、この義士をうたったお陰だからと報恩のため大石良雄の神社を建てたい、赤穂にあっても、その本懐を達する元を築いたのはこの山科である。昭和 4 年 12 月 14 日山科勸修小学校の義士講演会に吉田大和之亟出演し、この会の主催者の人々と義士会館創建の議が出ました。6 年 3 月 14 日この人たちが集まり山科義士会発会式を行い大和之亟はこの会の後援を引き受け、同 29 日山科義士会と大和之亟

の両者より義士会館建設の企図し、京都府知事佐上信一に申し出ました処、知事は大石神社を創立し会館を付属建物の一部にしたらと提議し一同同意、そして昭和 10 年 12 月大石神社鎮座祭が斎行されました。

この山科義士会発会当初から地元山科の方々の献身的なご奉賛により各種行事が継承されて参りました。この発会当初の志しを受け継ぎ、現在京都山科義士会として各種事業に取り組んでおります。

昨年 12 月 14 日「山科義士祭」におきましても山科各地で祭礼、法要が営まれ、第 47 回山科義士行列も盛大に行われ目的地であります大石神社にて祝いの勝鬨を納められました。また、各種団体の遺跡・遺産巡り、歴史ウォーク、小学生への地元歴史学習など、当会より講師を派遣し講演会を開催するなど、忘れ去られがちな「忠臣蔵」の継承に努力しております。



令和 5 年の山科義士祭

赤穂義士会活動の取り組み

会長 牟禮正稔

全国義士会連合会の皆様には平素より格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

赤穂義士会では、赤穂義士の普及啓発のためさまざまな活動に取り組んでおります。

今回は昨年度の活動の一環をご紹介させていただきます。

赤穂城二之丸庭園屋形舟遊覧

赤穂城二之丸庭園は平成14年に本丸庭園とともに「旧赤穂城庭園 二之丸庭園」として国名勝指定を受けて以降、発掘調査の成果に基づき赤穂城築城当時の姿に復することを目途として整備が継続的に行われています。近年は池泉・土塀等の整備も進み、往時の姿に近づいて参りました。これらの史跡の活用と義士顕彰のため、赤穂義士会では平成18年度のじぎく兵庫国体開催に合わせて「赤穂城二之丸庭園 屋形舟遊覧」を実施、好評を博して以後、コロナ禍による中断はありましたが毎年運航しています。屋形舟遊覧はボランティアの協力のもと浅野号・大石号の二隻の木造船を運航し、市民や観光客

に二之丸庭園池泉を回遊していただくというイベントで、昨年度は4月29・30日と義士祭の12月14日に運航し、合わせて370人の方々に乗舟いただきました。景品付き射的アトラクションのイベントもご好評いただきました。

第3回忠臣蔵浮世絵デジタル展覧会の開催

赤穂市では立命館大学アート・リサーチセンターの協力のもと、平成30年度より赤穂市が所有する忠臣蔵浮世絵をインターネット上で公開し、現在約2600点の公開となっています。令和元年度・2年度にはデータベース収録作品を中心にWeb上で第1回「討入り図の諸相」第2回「義士の頭領・大星由良之助」と題したデジタル展覧会をそれぞれ開催しました。令和5年度は11月3日より「上方の忠臣蔵浮世絵」と題して江戸時代後期から明治時代に上方（大阪・京都）で出版された浮世絵を紹介する第3回デジタル展覧会を公開しています。同展は、令和4年度に赤穂市立歴史博物館で開催された特別展「上方の忠臣蔵浮世絵」をベースに構成し、赤穂市所蔵作品を中心に立命館大学アート・リサーチセンター所蔵作品を加え、89件・161点の作品に解説を付けたものです。浮世絵といえば江戸のイメージがありますが、上方においても独自の発展を

遂げ、とりわけ上演回数が多かった忠臣蔵は上方においても最も多く描かれた演目となっています。なお、第1回〜第3回の展覧会はいずれも継続公開しておりますので、浮世絵で展開された忠臣蔵文化をぜひともお楽しみいただけましたら幸いです。

赤穂義士顕彰板更新

赤穂義士会では、義士宅跡などの義士関連史跡の普及啓発を図るため、市内各所に顕彰板を設置しております。また同時にこれらの維持管理にも力を注いでおります。令和5年度には木製支柱の腐食により倒壊した赤穂城塩屋門跡の説明板1基の修理と、御崎地区にあります正福寺の路地入口と山門前の2基について説明文の更新を行いました。今後も顕彰板の維持管理に努めて参ります。

交流事業

赤穂義士会では赤穂義士及び義士に関係する史実の研究及び業績の顕彰を図る目的で全国各地の義士研究顕彰団体・機関との連携及び研究交流を事業のひとつとしております。その一環として、平成21年度より交流大使の派遣を行っており、新型コロナウイルス感染症の影響で中止していましたが、昨年度は4年ぶりに再開することができました。12月

10日の大阪義士会による赤穂義士奉賛祭典（於吉祥寺）、12月14日の京都義士会による赤穂義士追悼法要（於本妙寺）に会長の名代として市民2名ずつを「赤穂義士会交流大使」に任命し、派遣いたしました。今後もこの交流事業を継続していく予定です。

赤穂義士会講演会

赤穂義士会では例年、赤穂義士や忠臣蔵に関する著作のある研究者や作家を招き、講演会を開催しています。令和5年度は12月9日に時代劇研究家の春日太一氏をお招きし、「映画会社やテレビ局はなぜ『忠臣蔵』を作らなくなったのか」と題してご講演いただきました。忠臣蔵映画・ドラマが制作されてきた歴史や制作事情についてお話いただいたほか、忠臣蔵の魅力を次世代に継承していくために何が必要か、ということなど映像業界の事情に精通した春日氏ならではの視点でご講演いただきました。

今後もさまざまな分野の講師を招き、多彩なテーマでの講演会を開催し、義士や忠臣蔵文化の普及啓発に努めて参ります。ご興味のあるテーマがございましたらぜひご聴講いただけましたら幸いです。

最後になりますが、平素より赤穂義士会にご協力いただいております皆様方にこの場をお借りし改めて厚くお礼を申し上げます。



交流大使の派遣（本妙寺）



屋形舟遊覧



春日太一氏による講演



赤穂城塩屋門跡説明板

大石主税など十名の

切腹位置の確定

—松平隠岐守中屋敷絵図—

荻原 栄

令和六年三月十三日にイタリア大使館で赤穂義士の法要が執り行われ、中央義士会からも八名が参加した。イタリア大使館は、松平隠岐守中屋敷跡地にあり、元禄十六年二月四日に大石主税、堀部安兵衛、中村勘助、貝賀弥左衛門、不破数右衛門、岡野金右衛門、大高源五、菅谷半之丞、千馬三郎兵衛、木村岡右衛門の計十名が預けられ切腹したところである。

法要が終わり雑談などしている折りに、ベネデッティイタリア大使が、江戸時代の松平隠岐守中屋敷絵図を持ってこられた。そこにいた中央義士会の関係者は全員集まって見入った。これまで、江戸時代の松平隠岐守中屋敷の絵図は見たこともなかったからである。それから書院位置などを確認し、大石主税らの切腹した場所の推定に入った。これまで、中央義士会の研究者からの言い伝えでは、イタリア大使館の池の東側あたりが切腹場所であるとは聞いてはいたが、その確定は屋敷絵図がなかったためできていなかったのである。

絵図を確認してみると、文字が小さく読みづらく、読み解くのはその時はできなかった。

絵図は、伊予史談会が「伊予史談会所蔵絵図集成」の中に「江戸三田御中屋敷絵図」としてすでに刊行されていることが判明した。

早速図書館に行き、その絵図を確認してきた。図1が中屋敷絵図である。この絵図は嘉永六年九月の写しである。幕末に写された絵図が元禄時代の屋敷と同じであることはめつたにないが、嘉永六年より以前にあった絵図を写していること、松平邸の位置は、元禄の頃から幕末まで同一であることなどから、元禄時代の切腹位置図と比較することで、かなりの正確さで切腹位置を確定できるのではと考えられた。

中屋敷絵図には、敷地の寸法も記載されており、南北百二十八間、東西百四十一間のやや東西に広いかたちをしている。現在の寸法に直すと南北二百四十三メートル、東西二百六十八メートルとなる。

江戸時代の中屋敷の場所は、御府内場末往還其外沿革図書に載っており(図2)、現在の三田二丁目にあたる。御府内場末往還其外沿革図書には、元禄十四年の図もあるが、幕末まで位置も大きさも変わっていない。

中屋敷の敷地寸法が分かっているので、現代地図上の寸法に合わせて屋敷絵図を置くことが可能である。それを図3に示す。図3中赤枠で囲った範囲が、中屋敷の敷地、青線で囲った範囲が現在のイタリア大使館の敷地である。江戸時代の中屋敷は約二万坪の広大な面積を持ち、イタリア大使館はその一部にあたる。また、現在ある池は、元禄のころより拡張されて大きくなっている。

大石主税らが切腹した時の様子は、波賀朝栄聞書として残されている。波賀朝栄は、赤穂義士が大名に預けられる際に、松平家として、大目付仙石伯耆守邸に受け取りに行き、また、大石主税と千馬三郎

兵衛の介錯もしている人物である。その聞書に切腹位置と、立ち会った人々などが細かく記載されている。それを図4に示す。なお、図1から5までは全て図の上方が北、下方を南に統一してある。図4から分かるが切腹位置は、書院の南側で、書院から少し離れた位置に三方が置かれ、そのすぐ後ろに畳二畳、その上に綿入りの布団が敷かれている。切腹人の西側に介錯人が立つ位置が書かれている。切腹人は、書院に座している幕府の検使、杉田五左衛門と駒木根長三郎の方を向いて切腹する。

この図4に対応した中屋敷図の拡大部分を図5に示す。図5と図4を比較してみると分かるが、両方とも書院の横に二ノ間があり、回りを縁側が囲んでいるところも一致している。他の細かいところは少し異なっているが、図4の切腹位置は図5に示した切腹位置とほぼ一致しているといつてよい。この切腹位置を図3上にも示した。以上から切腹位置は現在の池の東側大使館の建物に近いところであると言えよう。

写真1に、現在のイタリア大使館の池の写真を示す。池の左少し上に舟が浮かんでいるが、その舟の手前側の池の中が切腹位置になる。なお、後世切腹位置を残すために池を拡張し、池中としたの言い伝えもあるが真偽の程は不明である。

最後に「江戸三田御中屋敷絵図」の使用を快く承諾いただいた、伊予史談会殿に御礼申し上げます。

参考文献

- 一、「伊予史談会所蔵絵図集成」伊予史談会発行
- 二、御府内場末往還其外沿革図書
- 三、「波賀朝栄聞書」赤穂義士史料 中央義士会発行

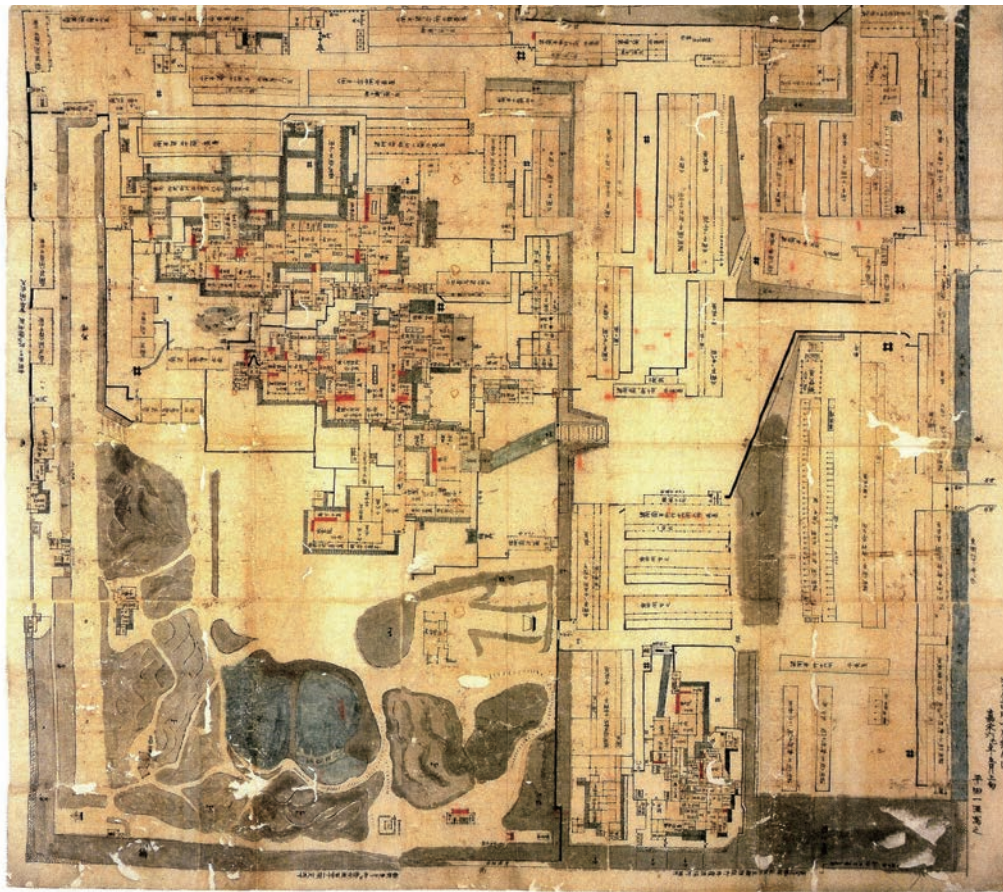


図 1 江戸三田御中屋敷絵図
伊予史談会所蔵絵図集成より

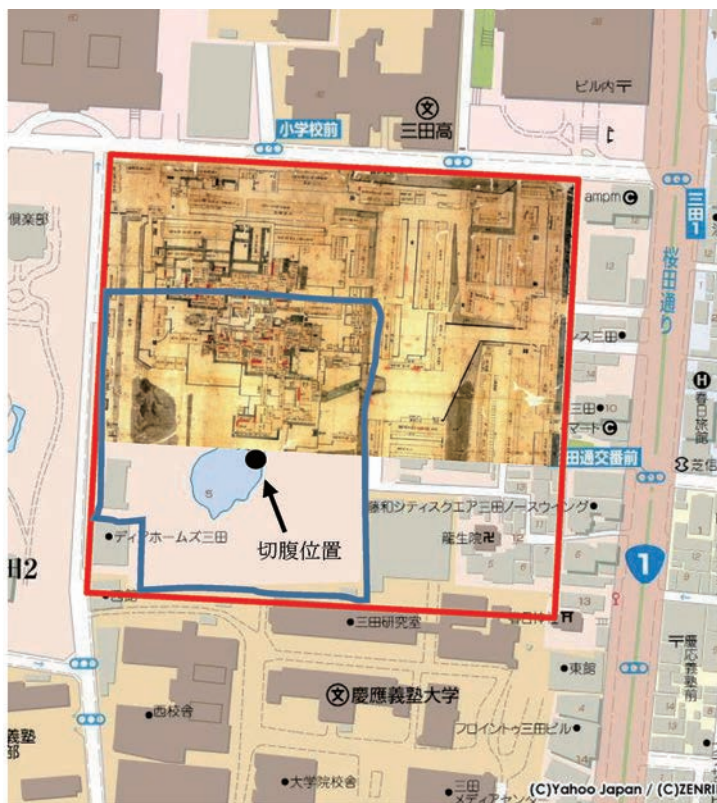


図 3 現代地図の上に江戸時代の屋敷絵図を重ねた図
赤枠は江戸時代三田御中屋敷の敷地。切腹位置は真ん中左の池の東にあたる。青枠が現在のイタリア大使館の敷地



図 2 江戸時代松平隠岐守中屋敷位置図
御府内場末往還其外沿革図書より



写真 1 イタリア大使館の池
池の左上の舟の手前あたりが切腹場所

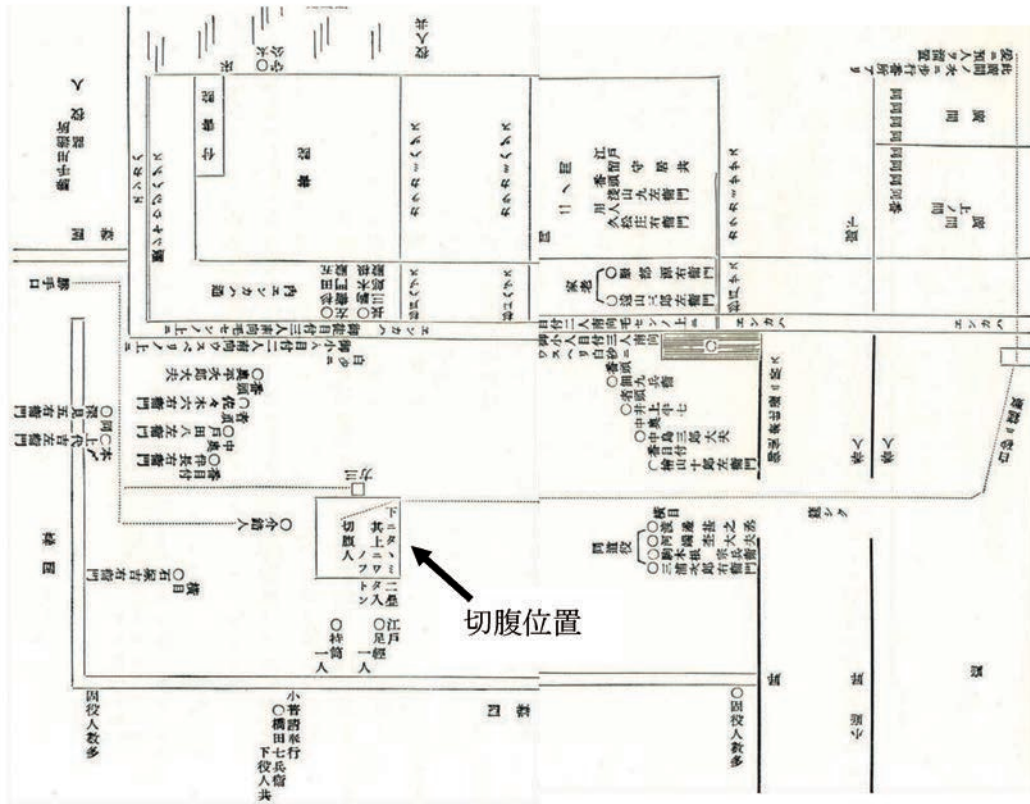


図 4 切腹位置図

赤穂義士史料「波賀朝栄間書」(原題 四十六士物語)より

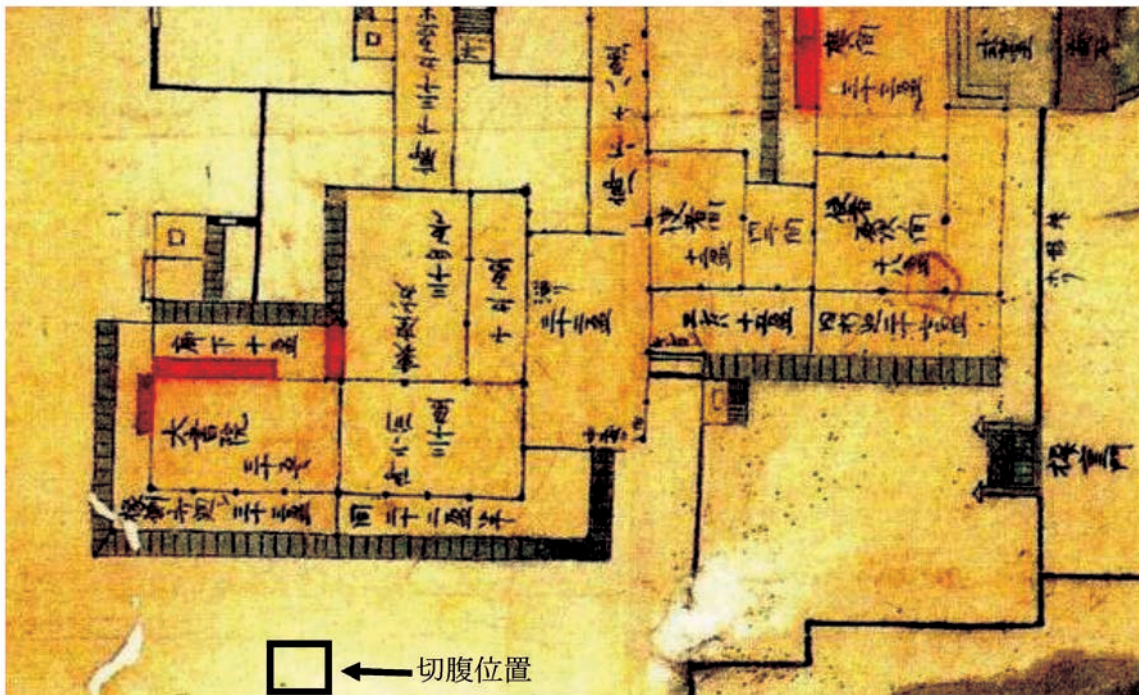


図 5 江戸時代中屋敷一部 切腹位置

江戸三田御中屋敷絵図より

『岡本元朝日記』史料批判(一)

蟹江 元

吉良義央の人物論で悪評が述べられた古文書や伝承は、単に伝聞ということも多くは信用性に欠けるとされ退けられていることも多い。今回はその事例の一つとして『岡本元朝日記』を評価してみたい。

(一) 吉良義央の美術品所望(吉良義央の人間像の側面について)

秋田県公文書館が所蔵する秋田(久保田)佐竹家家老が残した『岡本元朝日記』元禄十四年三月二十五日条によると、義央は「日頃から横柄な人のようで、また方々で名物を所望して入手する悪い癖があるといわれていた。先年、津藤堂家の三代目と泉守高久の初めての振舞で屋敷へ招かれた時も、飾られてあった雪舟の三幅対(さんぶくつい)の掛軸をせびり持ち帰った。このようなことが方々であるので、出入衆内々にて吉良殿が来るときはあまり良い道具を飾らない方が良くと申された」との記述がある。元朝の異兄弟である佐竹家江戸屋敷大番頭渋江十兵衛光重の十七日の情報によるものである。

「元禄十四年三月二十五日」条『岡本元朝日記』(秋田県公文書館所蔵)

(略)

吉良殿日頃かくれなきおうへい人ノ由。又手ノ悪き人ニて、且物ヲ方々よりこい取り被成候事多候由。先年藤堂和泉殿へ始て御振舞ニ御越候時も、雪

舟ノ三ふく対御かけ候へ八則こひ取被成候よし。ケ様之事方々ニて候故、此方様へ御越之時も御出入衆御内々ニて目入候能御道具被出候事御無用と御申被成候由ニ候。

これについて「小林輝久彦・幕府高家・吉良上野介」『上杉と吉良から見た赤穂事件』は「藤堂家と義央の間に縁戚関係は見出せず、また藤堂家と幕閣との取次などの御用頼みを務めた形跡も認められない。このように交際関係の認められない藤堂家での話も事実ではないだろう」と批判している。

『吉良家日記』によると藤堂家は寛永十六年(一六三九)公家衆の宿所に大学宿坊を使用させた。大学は藤堂左少将高次である。協力的だった。正保二年(一六四五)には、伊勢専修寺(せんじゅじ)津市の真宗高田派本寺院)門跡堯朝(ぎょうちよう)翌年幕府との関係悪化で自決、高次妹の高松院を妻としていた)が藤堂大学別宅を宿所としている。

また、『寛政重修諸家譜』藤堂氏によると、藤堂家は屋敷飾りなどを重宝する家柄だ。高次は寛永七年(一六三〇)休務肩衝(かたつき)、吉光の脇指、虚堂(きどう)の懸幅また師聖坊の肩衝、貞宗の脇指、輝東陽の懸軸を台徳院・大猷院に献じた。子の高久は延宝五年(一六七七)に虚堂の墨蹟を献じた。これは父の遺物であり、藤堂家では美術名品の収集が為されていた。肩衝は茶器のことで、吉光は鎌倉時代の刀工栗田口吉光、虚堂は南宋時代の禅師虚堂智恵の名品、師聖坊は師匠坊ともいい名物の茶入れ、貞宗は鎌倉時代の相州刀工で、輝東陽は中国の

禅僧東陽徳輝のことで千利休などの所用に出てくる名品と思われる。

高久の弟の右京大夫基恒は実は藤堂家から高家大沢民部大輔基将の養子となった人物である。基恒は義央と交代で京都上使を務め、二人は高家を代表する立場にあつたため、義央を藤堂本家にも招いたのである。その時の実際が『岡本元朝日記』に記述されたと思われる。藤堂家は高家の大沢家と親しく、御用頼みは大沢家がやっていて、人材不足の大沢家に頼まれて基恒を養子にしたのだろう。『公室年譜略』は家臣喜田村矩常が藤堂家三代の高虎・高次・高久の事績を編年集成したもので、寛文四年(一六六四)七月大沢基将が金三百両を六年の割賦で藤堂高久から借り入れたことが書かれていて両家の関係が強かった。義央と上杉家程ではないが、やはり大沢家も藤堂家の合力を得ていた。

ところが、この基恒は元禄十年に死去し、跡は養子の基隆が十歳で継ぎ表高家となった。高家肝煎は畠山民部大輔基玄・大友近江守義孝が就任し義央と三名となった。伝統の地位を喪失した大沢家としては、当然高家肝煎への復帰を狙うのは当然の成行きだろう。この時期に大沢家は桂昌院人脈に取り入り、その地位を回復する動きをしていた。

基恒と義央の関係については、二つ対立が伝えられる。義央は長く高家職にあり事実上独走状態で、基恒がいて吉良家権力の抑えになっていた。「堯恕法親王日記『妙法院史料』には延宝九年(一六八一)基恒の面子を潰す義央の発言があつたことを伝えて

いる。また正月儀式で基恒・義央兩人が問答したことが「史談会記事」「舊幕府」に伝わっており、基恒はその年に心痛からであろう死去したとみられる。

基恒は、元禄三年（一六九〇）に京都参向の上使役を命ぜられたが忌中のため、義央が代役を司った。このため元禄四年から上使の代役が事前に決められ、この年の義央の代役は由良信濃守頼繁で、元禄六、八、十年は義央の代として基恒である。元禄十二年は基恒が既に死去していたので大友義孝が代だった。

義央は急の上使役については心許無いと心配する文書を残している。

「吉良義央書状」延宝二年五月十六日 華蔵寺所蔵尚々、去九日京都夥敷炎上申候、委曲安兵衛方へ申遣し候間、書付可有被見候、若上使二可罷登哉と無心元存候

吉良家内政における経費増大を嫌がっていたとみられる。

基恒のあと、大沢家の中核は大沢出雲守基躬（もとみ）だった。「追記十六条」『元禄快挙別録』の寛永寺中堂供養には「東叡山中堂建立供養記の元禄十一年八月晦日条「来月三日、中堂供養に付、今日習礼有之。高家吉良上野介、畠山民部大輔、大友近江守、京極対馬守、織田能登守、大沢越中守、御馳走人秋田信濃守、藤堂備中守、黒田伊勢守何も堂内東之方置之上有之」とある。大沢越中守は、のち出雲守となる基躬で、藤堂備中守は備前守高堅（たかかた）（伊勢久居五万石）しか該当しない。

基恒の兄弟は藤堂高久、高通、高堅（たかかた）、高睦である。藤堂高通は藤堂高次の次男で伊勢久居初代となり、二代は弟の高堅で寛永寺中堂供養記に馳走人として其の名がみえる。

高通は佐竹義處（よしずみ）の娘清（きよ）を養女にしたが幼くして死去した。『岡本元朝日記』には元禄八年一月十六日条おそらく参勤の挨拶にその妻清水院（黒田長興娘彦子）とともに高通の名がみえる。清水院の死去について元禄十四年一月に記述がある。また、黒田長興の妻は佐竹義宣養女で継室は佐竹義隆娘である。

以上から高通と義處は親族で交際もあり高堅と基躬は馳走人と高家として面識はあるが、佐竹家への出入衆となると、佐竹家・大沢家は直接の関係を文献上筆者は見いだせない。内々とすれば、義央に話が漏れなようにとのことであろうか。義央が藤堂家で美術品をせびった可能性はとも高いのではないか。

「伊東成孝・秋田藩重臣が記した赤穂事件」『古文書倶楽部二〇号』は『岡本元朝日記』から「時代劇の吉良像はあながち間違いいはない」とした。

義央が美術品などを所望した例として他に『鹿島藩日記』の元禄十一年九月二日や十一月十五日、義央が香炉などの道具を所望し結局入手したことが明らかである。鹿島鍋島家は佐賀鍋島家の支家で、「小林輝久彦・幕府高家・吉良上野介」『上杉と吉良から見た赤穂事件』では、佐賀鍋島光茂が義央の相聲で親戚だから気安さで道具を所望したとして普通のことだとするが、普通は所望などしない。遠い

分家筋に気安く言えば当然嫌で記憶に留める。

(二) 光重のもたらした刃傷事件の情報について

刃傷事件について原文は次のとおりである。

(略)

二十五日、くもる、昨晚江戸より十兵衛状越申候、今月十七日日付に御座候、江戸二珍事候由。故ハ、公家衆勅使二御下り候由、右之御馳走ヲ浅野内匠播州赤宇五万石の主へ被仰付よし、当月十四日二於御城勅答御饗応の筈二御座候て公家衆登城、内匠殿御同道被成候由、最早將軍家出御近節大廊家と申所に而、吉良上野介殿ヲ後より内匠殿小サ刀二て切付被成候由、うす手二候由、上野介殿刀二手ヲかけ何ヲするやと取て返給ヲ、畠山民部殿御言人誰カ両方取押、内匠殿乱氣と被申候由、是二て上野殿もしまり被成候由、則内匠殿ヲ八田村右京殿へ御預ケ被成、其夜中二切腹二被仰付候由、上野介殿□□疵養生いたし罷出可相勤由被 仰付候ト云々、上野介殿高家衆二候、又畠山も高家衆二候、毎度 勅使御取次ハ高家衆被 仰付候間其御役二可被出と存候、砌意趣二不被知言葉も不懸被成候ハ内匠殿乱心二候、尤殿中所がら二候故被 仰付可有此事二存候 (略)

佐竹家は外様であり刃傷事件当日は江戸城にいないので情報は取りにくい状態だった。光重の情報の前半は「吉良義央が刀に手をかけ応戦した、浅野長矩は乱気」と明らかに事実と異なる。また「田村家へ預けられ、夜に切腹となるが吉良には咎めなく、養生のうえ従前通り勤めるよう伝えられた」ともあ

る。喧嘩ならば両成敗が適用されるが、そうならぬのは長矩の乱心であり、ところが義央に処分がなく長矩にのみ厳しい即日切腹となったのは現場が殿中の勅使答礼の場だったからだと言嘩両成敗原則を踏まえ、甚だ疑問に感じたことを光重が率直に書いて秋田に送ったとみられる。情報に心情を加えたもので、当時の武家に共通の反応であろう。

「畑中正博・赤穂事件再び・東山文庫「秋田史談会記事」より」『古文書倶楽部二二号』は、刃傷の経緯を書いた家老梅津忠昭の日記があるとして取り上げた。

「梅津忠昭日記」を篆刻したという文書を次に掲げる。

三月十四日（元禄十三年）天気よし

（略）

一今酉の刻、大嶋小助より手紙参候。今日於殿中、浅野内匠頭殿吉良上野介殿を後より二太刀御討被成候。其節其場に御留守居御番梶川與惣兵衛と申衆、御在合内匠殿御討の小サ刀御取候由、上野介殿は残命にて屋敷へ引取、内匠殿は田村右京殿へ御預の由、即戸田能登守殿被仰付於御評定所御詮議有之由御座候、

同十五日 天気よし、

（略）

浅野内匠殿、昨晚の内に切腹被仰付候、吉良上野介殿へは、疵平癒次第前度の通り可相勤の由被仰出候云々、

（略）

梅津半右衛門忠昭が江戸にて一四日に大嶋小助重為から手に入れ書いたもので「吉良にうしろより二太刀あびせ梶川に刀を取られたこと、馳走人は浅野に戸田が代り、評定所で詮議される」とある。これは秋田史談会が第十三回例会として明治四十四年（一九一）一月に忠昭の日記として会員に紹介したもので、それを秋田魁新報が報じ記事にしてスクラップ集成したのみ残った。史談会が筆写した原本も残らず、元禄十三年とあるのはこの新聞記事が間違えて追記しただろうとされている。

一四日当日に大嶋重為の手元にあったとすれば、江戸の同家中で共有されるはずで、光重と重為の情報に差を生じたことは不自然である。元朝の他の日付の日記記事には光重・重為の手紙による元朝への情報も書いているので、この重為情報があれば重為は元朝に伝えたのではないか。極秘にすべき理由はどこにもない。そもそも当日江戸城詰していない義處近臣の重為がなぜ梅津忠昭に手紙を出したか筆者は理解できていない。義處が情報を得ることができたとすれば、吉良家でしかないのが吉良家で得た情報と記載されるはずであろう。筆者がこの日記を疑うのは、そうした整合性である。

また史談会の人物ならば、原本があれば大切に残すはずだが行方不明である。というわけで史談会の新聞記事の複製しか残っていない。残念ながら秋田県立公文書館は「梅津忠昭日記」を所有せず江戸時代に筆写した『梅津忠昭日記抄』を秋田県庁からの移管で所有する（「佐藤隆・秋田県庁旧蔵古文書に

ついて」『研究紀要』第十六号）のみで、三月一四日の記事は『梅津忠昭日記抄』にはないのである。県庁に伝わらない日記を史談会がなぜ突然見出したのか、「梅津忠昭日記」を見出したことがなぜ新聞記事にならず、この刃傷事件だけ記事になったのか。もし『梅津忠昭日記抄』に三月十四日記事があったのなら、翌年の討入り記事も記述があるはずだが。この当主義處は討入に興味を示し事件直後に刀番平沢通有に調べさせた経緯（「畑中康博・赤穂浪士吉良邸討ち入りを記録した資料」『古文書倶楽部31号』『平沢通有日記』）があり、当然忠昭も関心があり書いたはずだからである。

（次号に続く）

（参考文献）

- 秋田県公文書館・岡本元朝日記第1〜3巻・秋田県2015
 2017
 青木昭博小林輝久彦・上杉と吉良から見た赤穂事件・米沢信用金庫2017
 西尾市史編さん委員会・吉良家日記 吉良町史別冊資料・西尾市2013
 寛政重修諸家譜 藤堂氏 大沢氏
 上野市古文献刊行会 喜田村矩常・公室年譜略藤堂藩初期史料・清文堂2002
 妙法院史研究会・妙法院史料・吉川弘文館1976
 戸川残花・舊幕府4巻1号・旧幕府雑誌社1900
 三田村鳶魚・元禄快挙別録・中公文庫1998
 古文書倶楽部20号・秋田県公文書館2007
 鹿島藩日記第1巻・祐徳稲荷神社1987
 古文書倶楽部22号・秋田県公文書館2008
 研究紀要第十六号・秋田県公文書館2010
 古文書倶楽部31号・秋田県公文書館2009
 平沢通有日記1・2・秋田市歴史叢書1・2・秋田市2007 2008

引揚げコースを歩く

柿崎輝彦

一月二十八日(日)中央義士会の恒例行事である引揚げルートを辿った。今回は播州赤穂から赤穂市議会議員二名を含め十四名の方が参加されるなど、コロナ禍以前に戻る五十名を越す応募があった。

今回は、すでに複数回参加された方も多く含まれており、それぞれが歩きながらの感じ方や興味の先が異なるであろうことを考慮し、参加者を三班に分け、一班は主に初めて参加された方、二班は播州赤穂からの参加者、三班は当会会員を中心に構成した。

一班の引率者はツアーガイドの先駆者として旅行業界でも有名な当会理事の遠藤信夫さんが担当。遠藤信夫さんは東京都内のあらゆるコースを自ら企画しガイドをしてきたことから、元禄赤穂事件については勿論のこと忠臣蔵以外の知識も豊富で、おそらく歩きながら歴史や周辺事情に関連した幅広い角度からの興味深い解説が聞けたことであろう。

二班は筆者が担当。主に忠臣蔵のふるさと播州赤穂からの参加者を引率。とくに赤穂市議会議員として前日に引き続き二度目となった井田議員、今回がはじめての荒木議員の両議員が参加。その他の方々も忠臣蔵が日常生活のなかで当たり前の存在になっているであろうことを考慮し、元禄赤穂事件を肌身で感じられるようなガイドに務めた。一方で、参加者からは赤穂での忠臣蔵事情などを教えて頂きながらお互いにとって有意義な時間を共有できたのではないかと考えている。

三班は当会ベテラン評議員(現参事)の磯貝信行さんが担当。当会会員を主体に編成したことから、メンバー全員がお互いに気心知れた同志だったこともあり、それぞれの忠臣蔵談義で盛り上がり、極めて満足度が高かったとの報告を受けている。議員さんは今回の引率にあたり、何度もコースの下見を重ね万全な準備を施されたと伝え聞いている。議員さん本当にお疲れ様でした。

すでに、これまで幾度となく説明を重ねてきたように、今日では中央義士会が過去に編集発表してきたルートとは数カ所で異なる道筋を歩いている。

その一つが、奥平家臣櫻井惣右衛門が書き残した書翰の解釈の齟齬を正した結果で、以前は引揚げ途中の一行が櫻井惣右衛門に門前で誰何されたとする奥平家の屋敷を、旧赤穂浅野家上屋敷に隣接していた中屋敷との認識を改め、汐留の奥平家上屋敷に是正。これにより、以前の現聖路加国際病院・聖路加国際大学北側を東西に抜けていたルートを改め、井伊掃部頭蔵屋敷南東端の辻番とのやり取りの史料を考慮し、軽子橋を北側から南下するルートに変更。

更には築地場外市場南端を銀座方面に西進するルートを改め、そのまま南下し濱御殿(現浜離宮恩賜庭園)の北西角の表御門前を新橋方面に進む。その右手一帯が奥平家上屋敷跡(現ベルサール汐留から銀座郵便局)で、浜離宮前踏切跡の辺りで一行が櫻井惣右衛門に誰何されたと考えられる。古地図によれば現築地場外市場の南端から西進し現采女橋手前を南下したようであるが、現在はその先が行き止まりとなっていることから、今日では築地場外市場をそのまま南下するルートを通らざるをえない。

基本、一行は泉岳寺までの最短距離を辿り、出来る限り無用な大名行列との遭遇や大名屋敷前を避けたルートになっている。今後、新史料等が発見されれば当然見直しもあり得るが、現在は当会が辿るルートがより史実に近いと言える。

但し、負傷者も多く、先頭が泉岳寺到着時にはシンガリまでは相当離れており、細かな部分では、途中どちらから行っても同一距離のルートも複数存在していることから、全員が同じルートを辿ったかは定かでない。少なくとも、後半は映画やドラマのような整然とした隊列ではなかったはずである。



泉岳寺門前



赤穂浅野家上屋敷跡前

イタリア大使館訪問と

堀部安兵衛のお墓

長徳寺住職 関根正隆

今年三月十三日、東京都港区のイタリア大使館を訪問する機会を頂きました。イタリア大使館の地は大石主税や堀部安兵衛ら赤穂義士十名が切腹した伊予松山藩松平家中屋敷跡です。この日はジャンルイジ・ベネデッティ大使が浅野内匠頭の御命日の前に泉岳寺様のご住職をお招きして法要を勤められるとのことで、この法要に同席させて頂きました。

十年前にも一度、大使館を訪問する機会を頂きました。堀部安兵衛の生誕地である新潟県新発田市では、堀部安兵衛武庸を顕彰する「武庸会」が平成二十五年に結成百周年を迎えました。この年に安兵衛が切腹したイタリア大使館を訪問したいと、直接、大使館にお願いをしましたが、断られ、意気消沈していたところ、新潟イタリア協会の助太刀があり、翌年の平成二十六年五月に念願の訪問が叶いました。実はこの時、密かな計画がありました。それは、安兵衛の DNA が染み込んだお庭の土を貰い受け、安兵衛を新発田に里帰りさせることです。訪問させてもらうことだけでも大変だったので、さらに土が欲しいと依頼すると訪問自体もできなくなるのではないかと、大使館で当日お願いする作戦で訪問しました。切腹した場所まで案内をしてくださった大使館の方に『土を下さい』と直球勝負！ヒッソリ

と土を頂いて帰りました。

その後、泉岳寺様、赤穂の花岳寺様からも分骨の許可を頂き、新発田の長徳寺に平成二十九年に堀部安兵衛のお墓を建立し大使館の土も一緒に納めました。納骨の当日には Yahoo! のトップニュースにも掲載され、大きな話題となりました。しかし、唯一の心残り、イタリア大使館の土は非公式のため墓碑には記載できないということでした。

そこで、もう一度、正式に土を頂けないかと相談させて頂いたところ、三月十三日の法要の際に土を頂けることとなりました。十三日朝六時の新幹線に飛び乗り、十時に大使館前に到着しました。中央義士会と新潟イタリア協会の皆様と合流し、いざ大使館へ！ エントランスから法要会場となるホールへ進むとウエルカムドリンクとイタリアのお菓子を頂きました。泉岳寺様の読経中には大使に続いて緊張しつつ焼香させて頂きました。

法要後、いよいよ土を頂ける時間となりました。すると大使が額装された旧松平邸の古地図（写）を持ってこれられ、柿崎理事長と共に切腹したと言われる場所を想定して、大使自らスコップで庭を掘り起こし、持参した骨箱に土を入れてくださいました。その後、庭の築山の上に立つ義士を顕彰する石碑の下にも頂きました。大使館を出ると言葉にならないほどの感動と共に帰路の東京駅に向かいました。

今年、新潟イタリア協会は結成二十五周年の記念の年で、大使を新潟にお招きしたいと言われています。もし大使が新潟に来て頂けることになれば、そ

の時に安兵衛のお墓に大使館の土を納骨して頂けないだろうかと思いを膨らませております。



イタリア大使館ベランダにて
ベネデッティ大使を囲んで



イタリア大使館の土採取
左端がベネデッティ大使

赤穂義士追憶の集い

荻原 栄

令和五年十二月十四日、泉岳寺において「討入り満三百二十一年赤穂義士追憶の集い」が行われた。天候に恵まれ、穏やかな日になったこともあり、さらに懇親会ではチケットの取れない講師として有名な神田伯山師が登場するとあって、百三十名の方が参加された。

午後二時から本堂で、泉岳寺の読経による法要と、続いて毛塚静精さんの奉納詩吟が厳かに行われた。



本堂での法要の様子

午後三時から柿崎理事長の挨拶と義士子孫や遠方から参加された方々の紹介が行われた。その後、お待ちかね神田伯山師の講談「罅屋宗伴」。

討入りに参加しなかった赤穂家臣が、骨董屋になって、討入りを援助した話。この話は聞いたことにはなかったが、熱演に引き込まれ、拍手喝采となった。



神田伯山師の熱演

その後、恒例の感謝くじ引きで、多くの方に当たりが出た。残念ながら当たらなかった方には残念賞が配られた。

なお、参加申込は定員を大幅に超える方々からあり多くの方に、お断りすることになったことを、ここでお詫びいたします。

浅野内匠頭追憶の集い

柿崎輝彦

令和六年三月十日、「浅野内匠頭追憶の集い」と題し高輪泉岳寺にて浅野内匠頭三百二十四回忌法

要を執り行いました。当日は、中央義士会会長浅野長様ご夫妻はじめ約四十名の方が参列されました。本堂での厳粛な法要に引き続き、関係者によつて浅野内匠頭墓域に卒塔婆を納めさせていただいた。法要時にお供えした献花はその後数日間同墓前に飾られることになりました。法要後は参列者一同庫裡二階に場所を移して第二部を開始。



浅野内匠頭墓前での法要

筆者より「昨今の忠臣蔵事情」と冠し、昨年七月より開始している泉岳寺義士墓域でのガイドを通して見えてきた、参拝者の実情並びに海外での反応などをお話しさせて頂いた。少なくとも我々が想像する以上に元禄赤穂事件は世界的に浸透しており、その評価は高く伝承されていることに驚かされる。この件については、別の機会にあらためて発表したと考えている。

また、はじめての試みとして余興に落語を一席設けてみた。お招きしたのは忠臣蔵に造詣が深く噺家として有名な三遊亭楽松師匠、お題は「淀五郎」。

今回の企画は中央義士会播州赤穂支部の矢野支部長のご紹介で実現したもので、これまで史実を中心に活動してきた当会にとつても有意義であったと考えている。長く忠臣蔵を共有し発展してきた演芸関係とも太いパイプを構築中であり、泉岳寺様を中心に親交が深まった講演・浪曲両協会に加え落語協会との交流発展の先駆けとして期待したい。



三遊亭楽松師の熱演

トリアはお楽しみ感謝くじ引き、今回も泉岳寺様をはじめ工芸呉服きぬや様（赤穂市）、切腹最中で有名な新正堂様はじめ多くの方々から貴重な品々のご協賛と与りました。なかでも急遽お願いした楽松師匠の直筆サイン色紙は極めて手が込んだ秀逸で当選者の方も大いに満足されておられました。お陰様で参加者全員に漏れなく景品が行き届くことができました。

一般社団法人設立のお知らせ

中央義士会は令和五年十二月十四日、東京法務局に一般社団法人設立申請を提出し受理された。これにより、一時期任意団体として活動してきた中央義士会は令和六年四月一日より一般社団法人として活動運営する。

当会は明治四十一年（1908）、当時九州日報（現西日本新聞の前身）社長で衆議院議員福本日南（本名 福本誠）が福岡市崇福寺（筑前福岡城主 黒田家菩提寺）に約五百人を集め開催した義士会を起源とし、その後活動拠点を東京に移した福本日南等を中心に、明治四十四年（1911）高輪泉岳寺における第四回義士会を経て、大正五年（1916）十二月十四日同泉岳寺において中央義士会発会式が挙行され、創立委員長の福本日南が初代幹事長に就任。昭和八年（1933）財団法人に認可され、当時二代目幹事長亀岡豊二が初代理事長に就任した。

敗戦直後の昭和二十年（1945）GHQにより解散命令が下されるも昭和二十四年（1949）に活動再開、その後平成二十年（2008）の公益法人制度改革により財団法人格を返納するも任意団体としてそれまでの全てを継承してきた。

令和六年四月一日一般社団法人中央義士会としての運営を開始した。

編集後記

全国義士会連合会の総会が三十年振りに行われた。全国にある赤穂義士の顕彰会が集まって、情報交換を始めた赤穂義士の顕彰を広めるために始まったが、一同に集まったの総会は、これまで第一回が行われただけで、その次が続かなかつた。三十年前とは各団体も代替わりが進み、関係性が薄れてきたこともあって、まずは親睦を図ることを目的とした。その目的は十分に果たされたと思われる。忠臣蔵が世間の話題から薄まってきた昨今、全国義士会連合会の結びつきは、今後益々重要となっていくと思う。

新潟の武庸会が、堀部安兵衛が切腹した松平隠岐守中屋敷（現イタリア大使館）の土を持ち帰り、新発田市長徳寺の安兵衛の供養墓に納めた。イタリア大使館を初め関係各所のご厚意と長徳寺住職の熱意によるものである。

中央義士会も長い間、財団法人から任意団体へと推移してきたが、正式に一般社団法人として、活動して行くこととなった。これからの活動範囲を広めていくことが可能になる。

編集 荻原 栄

校正 柿崎輝彦、進藤務、蟹江元

印刷 株式会社大印刷社